

医学のシンボル「蛇杖」の歴史

古川 明

医学は医療を行うための科学であり、医療は人類発生以来の古い歴史を持ち、呪術的、宗教的、経験的などの要素によって発達してきた。伝説によれば、ギリシャのアスクレピオス神殿では、当時としては、極めてすぐれた医療が行われていた。この事実はエピソードやその他の遺跡によって認められ、これによって、アスクレピオスを医神とし、その杖を医療、医療、医学ならびに広く、科学のシンボルとするようになった。

アスクレピオス（ローマ名エスクラピウス）の杖には、一匹の蛇がからまり、健康、長寿、不老などを象徴し、商業、通信、交通、平和などを象徴するヘルメス（ローマ名マーキュリー）の杖とは区別される。ヘルメスの杖には、二匹の蛇がからみつき、杖の頭に翼のついていることが多

く、カドゥセウス Caduceus と呼ばれる。カドゥセウスはギリシャ名「ケリケイオン」で、神の杖、聖者の杖、伝令使などの杖を意味する。

演者（筆者）は第八一回日本医史学会総会（歯科学、薬学合同、昭和五五年）に、「医学、歯学、薬学のシンボル蛇杖」の特別講演を担当し、医学のシンボルマークはアスクレピオスの杖で、ヘルメスの杖は誤りであることを強調した。このシンボルマークは現在ひろく全世界に普及されているので、将来も正しく使用したいものである。古くから、医学のシンボルとして、蛇杖のほか、蛇杯（盃）または蛇が単独で用いられている。

蛇に関する概念は、昔から善悪両面で象徴されているが、善の面から、蛇が脱皮して新しい体となるため、再生や復活を示し、賢慮、魔力、神秘、守護なども象徴する。ギリシャのほか、エジプト、メソポタミア、インド、中南米でも守護の意味で、蛇信仰の風習があった。ギリシャでは、アスクレピオスのほか、ヘルメス、ヒギエイア、ゼウス、アポロン、アテナらの神に蛇を配して聖蛇とし、神官の行う医療に、蛇が一役を買った。

杖は地上に生長する植物的生命を象徴し、権威、命令、力などを示す。アスクレピオスは丈夫な太い棒を杖として山野を歩き、病人を診療したが、図案では体裁上、比較的細い杖に描かれる。蛇杖の代りに用いられる蛇杯(盃)はヒギエイアの杯と称し、通常薬学のシンボルとされている。女神ヒギエイアはアスクレピオスの娘で、杯を用いて聖蛇を飼育した。この杯をアスクレピオスの杯とよんで、医学のシンボルとすることもある。

医学のシンボルは元来アスクレピオスの杖だったが、ルネサンス期からヘルメスの杖と混同され、現在は両者とも医学のシンボルとして用いられている。そのために、アスクレピオスの杖に対し、「メディカルカドゥッセウス」という語までできたが、本来「カドゥッセウス」というのはヘルメスの杖に限るのが正しい。医学のシンボルは「アスクレピオスの杖」であり、カドゥッセウスではないのである。

一八五六年アメリカ陸軍軍医部は、軍属の制服にそのマークとして、「カドゥッセウス」を付けた。その理由として、彼らは非戦闘員だから、平和のシンボルとして、ヘルメスの杖が適切だというのである。それは正しいとしても、

一九一二年に、このマークをそのまま正式に陸軍軍医部自身のマークと決めてしまった。そのために、一般の人たちから、ヘルメスの杖が医学を象徴しているのだと、誤解されるようになった。

この誤りが起る直前の一九一〇年に、アメリカ医師会 A M A がすでに、この点につき警告を発していた。また一九五〇年第一八回国際軍医薬学会議(パリ)で決められた国際軍医薬学会のシンボルマークは、中央に正しくアスクレピオスの杖が置かれ、ヘルメスの杖を用いていない。しかし韓国の軍医部はアメリカ陸軍軍医部に追従して、ヘルメスの杖をそのマークとし、日本の防衛医科大学校の校章もヘルメスの杖を採用している。

オランダ医師会は一九五六年一〇月に、キューバのバナナで開催された第一〇回世界医師会会議に、医学のシンボルにはアスクレピオスの杖を用い、ヘルメスの杖を使わないよう提案した。国連の世界保健機関 W H O (一九五六)、アメリカ歯科医師会(一九六五)、カナダ歯科医師会(一九六八)など、いずれもアスクレピオスの杖を、そのシンボルマークに採用している。ノーベル生理学医学賞のメダル

や、アメリカ医学史協会のオスラー記念メダルなどの裏面にも、アスクレピオスの杖が刻まれている。

歴史的古事にもとづいて定められ、全世界で採用されている医学のシンボルに対する理解が次第に普及されているが、誤った医学のマークが、いまだに新しく生まれ出ることが稀でない事実は、甚だ遺憾に堪えない。図案家たちの認識不足によることもあると思われるが、医学関係者も等閑に付すことなく、これに関心を持ってもらいたいものである。

(篠原病院)

医学史の歴史

中川米造

人間または、その集団である社会の理解にとって歴史的方法は不可欠である。この場合歴史は肯定的であるか、批判的であるかの別はあるが、いずれにしても現実の再確認を目標にしている。もしそれを欠くときは、現実は基点を失って漂泊する。

医学史は、これまで、いろいろの立場で編まれてきているが、医学史家が、自らの立場を明らかにすることは稀である。しかし、編まれたものから、逆にその立場を推測することは可能である。もちろん、そのような推測自体が一つの立場であることも確かであろう。

いま医学は一方で空前の繁栄をとげながら他方、急速に翳が拡がりつつある。これがどのように推移するかは、実は、いかに推移させるかという主体的な意志にかかわるものであり、その意志を確かめるための足掛りとして歴史的